

理数科教師の慢性的不足を補う、日本人協力隊員。

ケニアのセカンダリー・スクールには、公立のものと、地域住民の寄附で成り立っているハランベ（スワヒリ語で「みんなで一緒にやろう」の意味）・スクールがある。協力隊理数科教師が派遣されているのは、このハランベ・スクールである。ハランベ・スクールでは教師が不足している。

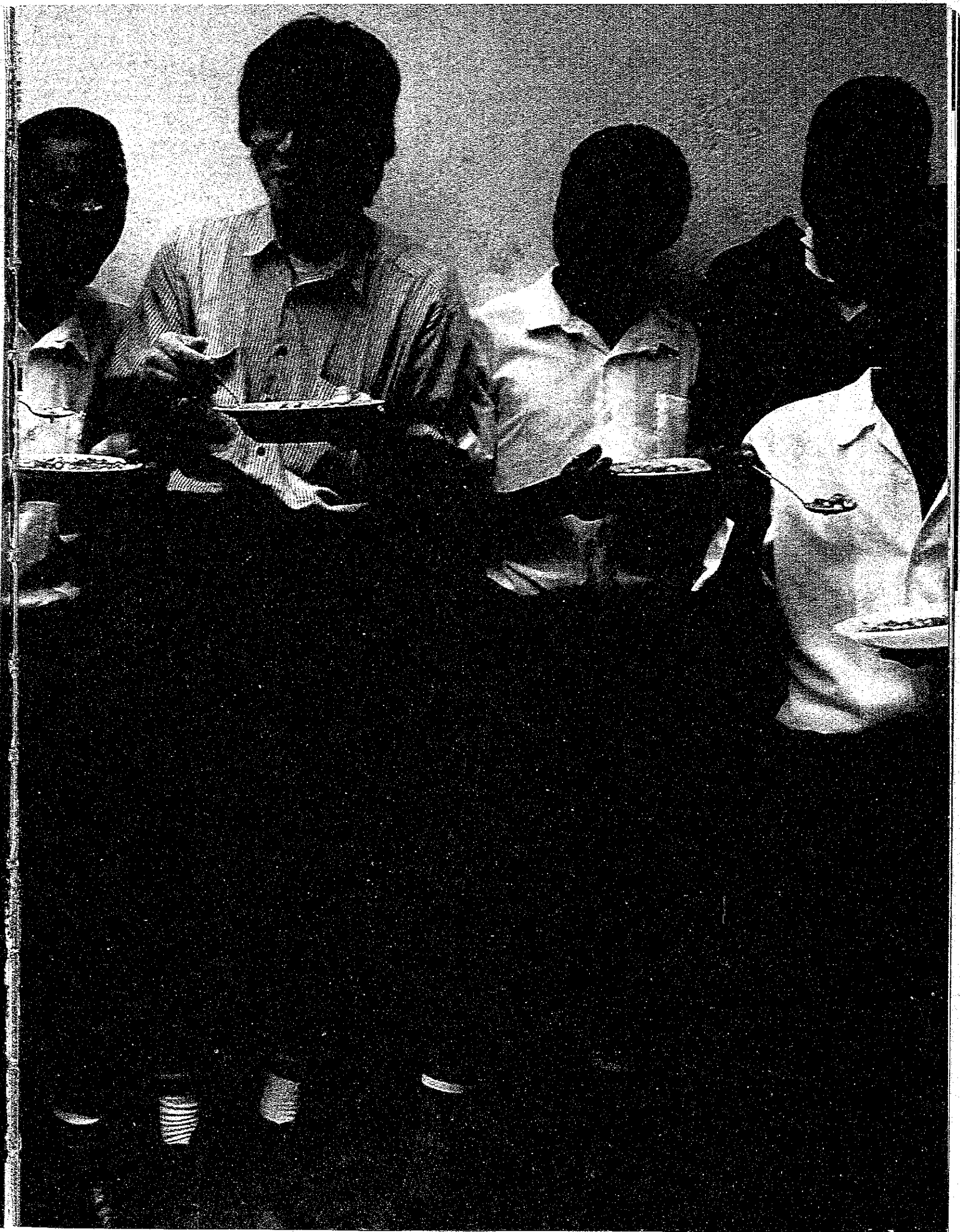
同様に比べ給料が安い、あるいは僻地であるためにケニア人教師が来たがらないということが大きな要因だ。

学費が払えず休学になるケースも少なくないという。

地域住民がボランティアを催すなどして学校運営に懸命である。

THE EDUCATIONAL PROBLEM OF

生徒たちと一緒に給食を摂る坂井隊員。
メニューはトウモロコシと豆を煮たもの。
カンバ族の常食である。
カンバ族はナイロビの東方170キロにある町、
キソイ周辺に住んでいる。
坂井隊員は町はずれにある生徒数310人の
コンピン・セカンダリー・スクールに
勤務している。
外国人教師は他にいない。
日本で高校の理科教師をしていたという
坂井隊員は、
日本で問題になっている校内暴力や
いじめといった問題は
まったく起こっていない反面、生徒たちには
みなケニア的な大らかさがある。
たとえば試験ともなると
カンニングのやり方も実に大っぴらで、
これはこれで手に負えないという



「自分の内側をみつめる、 またとない機会です。」

ケニア・ガンガオ中学教師、工藤美紀子の電燈のない生活。

ケニア南部にタイタ・ヒルズと呼ばれる山岳地域がある。山すその広大なサバンナは、ツアボ・ナショナルパークになっている。そして西に100キロほど離れて、アフリカ最高峰キリマンジャロがそびえ、晴れた日にはタイタから万年雪に覆われた山頂を真近に望むことができる。

タイタの山には農業を営むタイタ族の集落が点在している。サバンナに比べると涼しくはるかにしのぎやすい。標高2200メートルの山頂を間近に控えた森のはずれに工藤美紀子(24歳)が住む一軒屋がポツリと建っている。広い校庭とも荒地ともつかない斜面をへだてて工藤が配属されてきた貧弱な校舎があり、昼間は生徒たちであふれているが、夕方下校してしまえば人気はパタリと途絶える。少し離れた斜面には何軒かの民家があるにはあるのだが、一帯には電灯も普及していないために、夕闇の訪れとともに山影のなかに沈んでしまう。

ケロシン・ランプの赤いひかりのなか、テーブルをはさんで向かいあった工藤は饒舌だった。日本語でこうして会話するのはひと月ぶりなのだという。

「1年前、はじめて来た日のことは忘れることができません。ナイロビから送ってもらった車が帰ってしまい、ひとりぼっちになったとき、いったいどうやって過ごせばいいのか、本当に途方に暮れてしまいましたよ」

高校時代からボランティア活動に熱心で、なにか恵まれない人々のために役立ちたいと考え続けて協力を志願した彼女は、いちばんハードなところへ送って欲しいと願い出てこの山中のセカンダリー・スクールに来たのだった。大学時代にはロック・スターになりたいと一時考えたこともあった陽性の彼女にとって、突然始まったこの山でのたったひとりの生活は、想像だにできなかったことであった。

村人たちは素朴で親切ではあるが用心に越したことはない。暗くなると三重の錠をガッチリ掛け、よほどのこと以外は人を入れないようにしている。絶えず回し続けているラジカセから流れてくる音楽は、彼女にとって酸素のようなものだ。そのなかでひたすら本を読んだり手紙を書いて過ごす。

「毎週2、3冊は読んでいます。他にするこ

とがないんです。日本では考えられなかった体験ですが、自分の内側を見つめるにはまたとない機会です。こんな生活を1年も続けられたのだから随分強くなったんでしょうネ」「清く正しい修道院なみの生活じゃないですか」とからかうと、工藤は、「修道院……ですか……」

とつぶやき、間をおいて高笑いしていた。

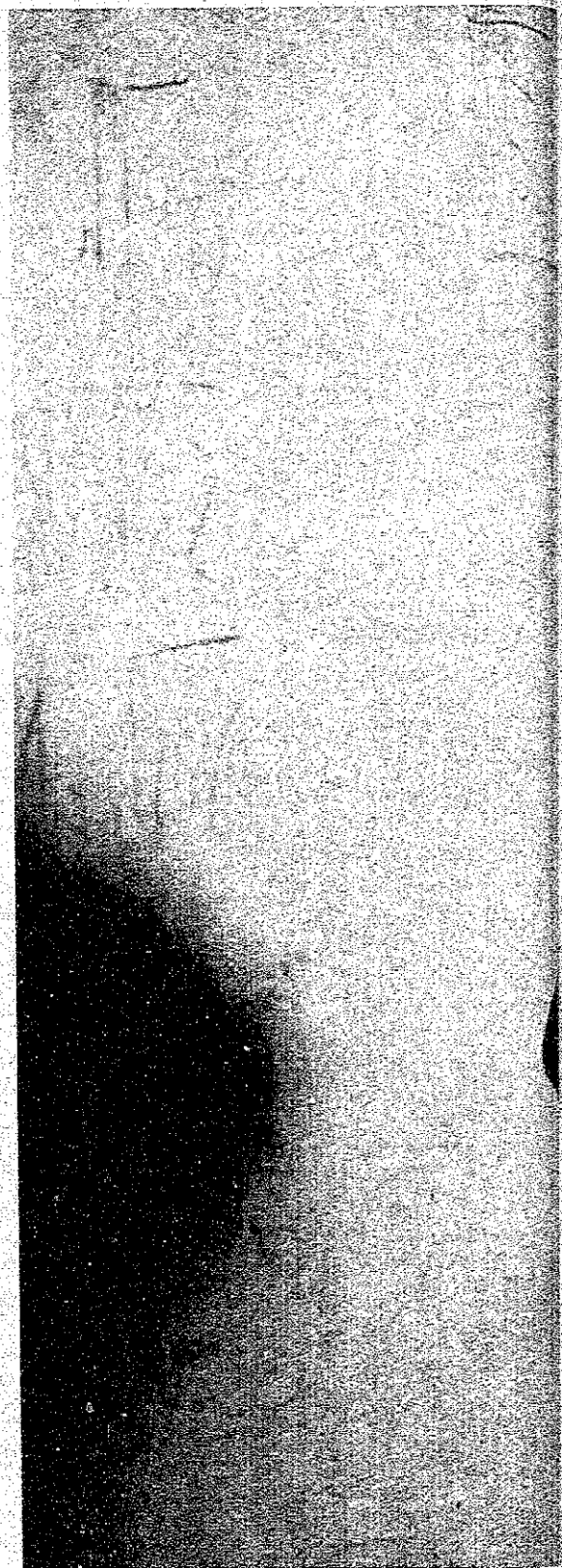
まわりに日本人はまったくいないがバイクで20分ほど下った麓の町には、アメリカのボランティア団体、ピースコーの隊員男女5人が共同生活をしている。英語の達者な工藤は、週末は彼らのところに押しかけて共同生活を送っている。毎週金曜日夜方にでかけていき、熱いシャワーを浴び、一緒に料理を作り、ビデオを観たりして月曜日の朝に戻ってくる。もしその時間がなかったらここでの生活を続けられていたかどうかわからない、と言う。土間の壁際に立てかけてあるバイクの荷台には、週末ごとに使う寝袋がしばりつけられたままになっていた。

理数科教師としての仕事は、英語で教えることに慣れてしまえばさほど難しいことではないらしい。受験、偏差値でビリビリし、そのうえ暴力沙汰で荒れる日本の学校に比べれば、授業内容はノンビリしたものだし、伝統社会のなか、素朴でしかもすでに生活者の風格を備えた生徒たちの間に不可解な社会問題などというものは滅多に生じない。ただ……女生徒が妊娠して退学になるというケースがしばしば起こると言う。もうひとりの理数科教師、坂井隊員の学校でも、ときどきあると聞かされた。相手が教師の場合もあるという。だがこれはケニアの地域社会ではごく日常的なことであり、生まれた子供は家族や社会が受入れ、普通に育てているのである。伝統的な社会習慣なのである。

「村人たちは親切だし、これまでは何の問題もなくやってきました。ただ、なんというかケニアの人たちって明るすぎるんですよ。こちらが悲しくなるくらい明るいんですよ」

その一方で考えてもみなかったことだが、アメリカ人たちと心の通う生活を発見したわけであった。

平穏な日々のなかで時々彼女をヒステリックにさせるのは、家のまわりの雑草に棲息す



るおびただしいサファリ蟻である。夜、トイレに立ったときなどにしばしば移動中の大群を踏みつけてしまう。すると凶暴な戦闘蟻がときには太股にまで這い上ってきて噛みつくのだ。これが痛いのだという。そのたびに大急ぎで服を脱ぎ捨て、悪態をつきながら大騒動を起こすのである。

わたしを迎えに来た車が路上の蟻の行列を踏みつぶしたのを眼ざとくみつけた彼女は、ザマーミロ！ とばかりにはしゃいでいた。



(上)数学を教える工藤教員。
ケニアの教育制度は、
8-4-4制になっており、
プライマリー・スクール8年間、
そのうえのセカンダリーが
4年間となっている。
だが山間部などでは
その通りに進んではおらず、
このクラスのなかにも
15歳で学校に行きはじめ、
20歳でセカンダリー2年生という生徒もいた。
(右)体育の時間にマラソンのタイムを計る。
すっかり現地の教員生活が板についている様子だ





工藤美紀子の 5大目標。

- ① 毎日笑顔
- ② あきらめない
- ③ おこらない
- ④ やせる
- ⑤ 1日3英単語



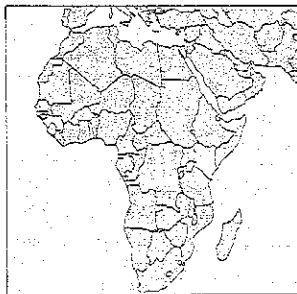
(右上)ケロシン・ランプの明かりで夕食の用意。

親しくなった生徒たちが、
ときどき自分の家の畑で穫れる
トウモロコシやジャガイモを
届けてくれる。

(上)生徒の家に昼食に招かれた工藤隊員。
メニューはトウモロコシと豆を煮たもので
村人たちはそれを常食にしている。

(中)トウモロコシ畑が山頂まで続くタイタの山地。
村人たちは、この山が世界でもっとも恵まれた土地であると信じている
と工藤隊員は言う。実際、山を下りた低地のサバンナは
暑さがひどく、また土地も乾いており農業には適さない。

(左)アメリカ・ピースコー（平和部隊）隊員と語り合う工藤隊員。
平和部隊はケネディ大統領の時代に誕生したアメリカ政府の援助組織。
日本の協力隊はその4年後の1965年に発足した。



派遣職種●理数科教師

1974年に3名の教師派遣でスタートした理数科教師は、'90年3月末現在で31名が派遣中である。

ケニアの中学校には公立の学校と地域住民の寄附によって運営されているハランベースクールがある。

隊員が派遣されているのは、教員不足が著しい僻地のハランベースクールである。

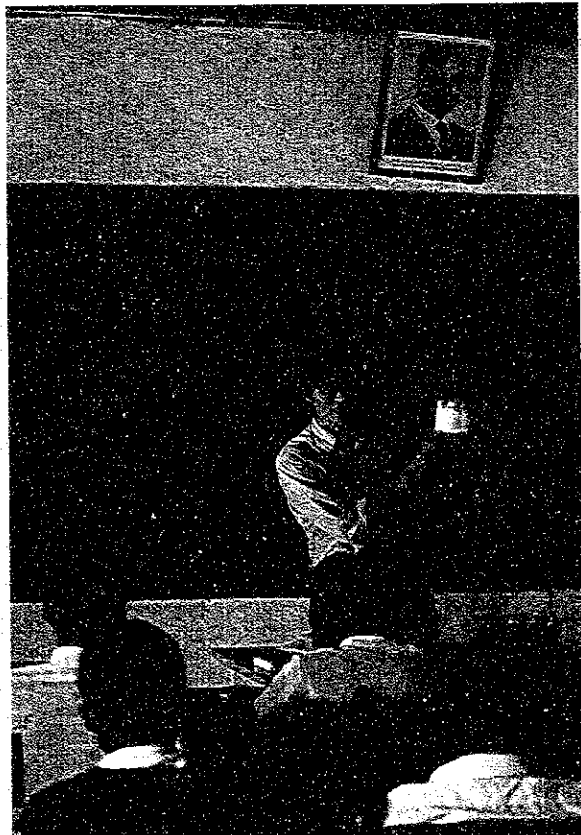
1974年以来、累計で195名が派遣されている。

ケニア●人口2294万人(87年)首都ナイロビ。

共和制をとっており、元首はD・A・モイ大統領。

公用語はスワヒリ語。

宗教にプロテスタント、カトリック、イスラム教など



(右)酸素をつくる化学実験に見入る生徒たち。

(上)坂井隊員の学校では、
どの教室にもモイ大統領の肖像が掲げられていた。
発展途上国では極めて日常的な光景である。

(下)草刈りをする生徒たち。

実はこの生徒たちは授業中に彼らの部族語をしゃべったということで
罰則として草刈りを命じられているのだ。
ケニアではどここの学校でも、
公用語であるスワヒリ語、英語以外の
部族語をしゃべることが厳禁されている。
多部族国家を統一していくためのナショナリズムの一面である。
しかし、教師たちは生徒のいない職員室に帰ると、
自分たちの部族語で日常会話を楽しんでいるケースがしばしばあるという。
職員室の工藤隊員とケニア人教師たち。
黒板ふきのタオルをふるい、体操(?)を加えようとする工藤隊員。
この生徒はみんなから、
モスキート(蚊)というあだ名で呼ばれていた



